

児童期における後悔の経験・予測・利用能力と社会的適応 (中間報告)

高知工科大学 小宮 あすか
明治学院大学 溝川 藍
京都大学 後藤 崇志

Abilities of Experiencing, Anticipating, and Making Use of Regret and Social Adaptation in Childhood

Kochi University of Technology, KOMIYA, Asuka
Meiji Gakuin University, MIZOKAWA, Ai
Kyoto University, GOTO, Takayuki

要約

本研究は、児童期における後悔の経験・予測・利用能力の発達的变化を明らかにし、これらの能力と社会への適応との関連を検討することを目的とする。成人を対象とする先行研究では、後悔には「過去の失敗経験を教訓とし、将来後悔すると予測される選択を避けることで、良い意思決定を導く」という機能的側面があることが論じられてきた。発達研究においては、「いつ後悔を経験するようになるか」といった後悔経験の発達について検討した研究は多いものの、後悔の社会的機能に着目して行われた研究は数少ない。本研究では、後悔の経験のみならず、後悔を予測・利用する能力に焦点を当て、その発達が社会への適応とどのように関連するのかを検討する。中間報告となる本論文では、本調査で使用するマテリアルの妥当性を検討することを目的として実施した事前調査の結果を報告する。

【キー・ワード】後悔, 感情予測, 感情制御, 児童, 社会的適応

Abstract

The present study aims to reveal how and when people develop their abilities of experiencing, anticipating, and making use of regret in childhood, and how these abilities influence social adaptations. Past research has argued that regret has a functional value as it leads to better decisions with regret embodying a painful lesson and making people avoid similar failures in the future. In developmental research, while many studies have revealed when children develop their ability to experience regret, few have examined how and when regret starts to function. In the present research, focusing on abilities of anticipating and making use of regret as well as

experiencing it, we will explore how they contribute to social adaptation. In the present article, as an interim report, we have reported the results of a preliminary study examining the validity of experimental materials.

【Key words】 regret, anticipated emotion, emotion regulation, children, social adaptation

はじめに

後悔は『今ある結果』と『あり得た結果』の比較により生じるネガティブな感情」と定義される (Zeelenberg & Pieters, 2006)。成人を対象に行われてきた先行研究は、後悔には「過去の失敗経験を教訓とし、将来後悔すると予測される選択を避けることで、良い意思決定を導く」という機能的側面があることを論じてきた (e.g., Zeelenberg, 1999)。この研究の流れの中で、後悔がその後の適切な意思決定を導くためには、個人が「後悔を経験する」だけでは十分ではなく、「後悔を予測し、それを利用する (後悔を避けるように行動を制御する)」能力を持つことが重要であると指摘されている (e.g., Zeelenberg & Pieters, 2006)。

しかし、児童期においても、成人と同様に、後悔を予測・利用する能力が、社会生活における適切な意思決定・行動に結びつくかどうかは明らかになっていない。児童を対象とした後悔の研究は近年始まったばかりであり、そのほとんどが「子どもは、いつ後悔を経験するようになるか」という後悔の認知的・情動的側面の発達に焦点を当てた研究に留まっている (e.g., Weisberg & Beck, 2010)。

そこで本研究では、後悔の経験のみならず、後悔を予測・利用する能力に焦点を当て、児童期における後悔の経験・予測・利用に関わる能力の発達の変化を検討するとともに、これらが社会的適応において果たす役割を明らかにすることを目的とする。先行研究では、子どもは7～8歳ごろに後悔を経験するものの、後悔を予測・利用する能力はそれ以降に獲得されることが報告されている (Guttentag & Ferrell, 2008)。そのため、本研究では、児童期中期以降の子ども (小学校4, 5, 6年生) を対象に横断調査を実施し、①後悔の経験・予測・利用能力の獲得時期を調べるとともに、②後悔の経験・予測・利用能力と社会的適応 (友人関係, 幸福感) の関連についても検討する予定である。

事前調査

本研究では Guttentag & Ferrell (2008) に従い、児童の後悔の能力の測定に場面想定法を用いる。しかし彼らの作成したシナリオは抽象的で理解しにくく、また本当に後悔を測定しているのか、妥当性の検証も行われていない。そこでオリジナルのシナリオを作成して大学生を対象に事前調査を行い、日本語版後悔・追求者尺度 (磯部ら, 2008) との関連を調べることで、後悔シナリオの妥当性を検討した。

方 法

参加者 大学生 96 名（女性 60 名，男性 36 名，平均 19.56 歳）が調査に参加した。質問紙は，関西地方の私立大学の授業で一斉配布され，参加に同意した参加者のみが質問紙に回答・提出した（回収率 100%）。

質問紙 質問紙は，参加者が後悔を経験する仮想場面をイラストと物語で提示し，その場面で参加者がどのように感じ，行動するかを問うオリジナルのシナリオ実験と，後悔・追求者尺度（磯部ら，2008），およびデモグラフィック質問から構成されていた。シナリオには，賞品としてもらえる物が異なる「飴シナリオ」と「金銭シナリオ」の 2 種類があり，2 つのうちどちらかのシナリオを含む質問紙がランダムに配布された。

シナリオは，Guttentag & Ferrell（2008）を参考に作成された（図 1）。参加者は，統制条件と後悔条件の 2 つのシナリオをこの順番で読み，質問に回答した。いずれの条件でも，参加者自身がお祭りや賞品当てゲームに参加する仮想場面が提示され，参加者は，場面内における自分自身の感情について回答した。

統制条件のシナリオでは，まず，3 つの箱のうち 1 つを選択すると，その箱に入っている賞品を得られるという賞品当てゲームのルールが説明された。続いて，一緒に説明を聞いていた別の客が先に 1 つの箱を選んで持ち去り，参加者は，残された 2 つの箱から 1 つを選んだことが説明された。その後，参加者の選んだ箱が開けられ，賞品が「飴 1 つ（飴シナリオ）」か「100 円（金銭シナリオ）」であることが示された。その後，最後に残ったもう 1 つの箱が開けられた。統制条件では，残った箱の中身は，参加者の賞品と同じ（「飴 1 つ」か「100 円」）であった。

後悔条件では，同様の賞品当てゲームに参加した旨が説明された後，3 つの箱の中には「大当たり（大量の飴）」か「500 円」」「中当たり（「飴 1 つ」か「100 円」）」「ハズレ（何も入っていない）」のいずれかが入っていることが示された。統制条件と同様に別の客が 3 つの箱のうち 1 つを持ち去り，参加者は 2 つの箱から 1 つを選んだ。選んだ箱は「中当たり」で，賞品は「飴 1 つ」か「100 円」であった。一方，残った箱に入っていたものは，統制条件とは異なり，参加者の賞品よりも良いもの（「大量の飴」か「500 円」）であった。

いずれの条件でも，シナリオを読みながら，(i)自分がもらえるものがわかったときに，どのような感情になると思うか，(ii)余っていたものが何かわかったときにどのような気分になるかについて，「1：とても悲しい」～「5：とてもうれしい」の 5 件法で回答した。

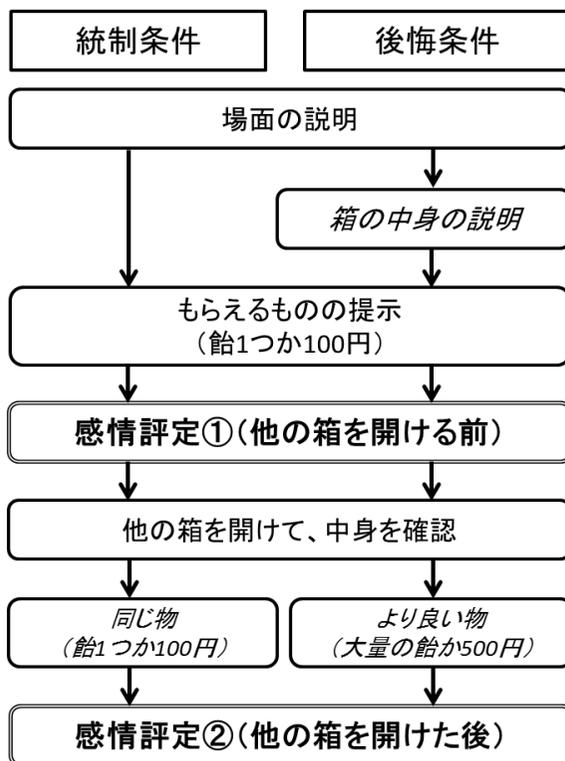


図1 条件ごとの質問紙の流れ

シナリオ実験の質問に全て回答したあと、参加者は、後悔・追求者尺度（磯部ら，2008），および性別・年齢を回答した。

結果と考察

経験後悔 条件ごとの感情評価の平均値と標準誤差を図2に示した。シナリオ（飴・金銭：参加者間）×条件（統制・後悔：参加者内）×フィードバック（箱の開封前・箱の開封後：参加者内）の3要因混合計画での分散分析の結果，予測通り，条件×フィードバックの交互作用効果が有意であった ($F(1, 93) = 24.19, \eta^2 = .21, 95\%CI[.077, .340], p < .001$)。しかし同時に，2次の交互作用が有意であり ($F(1, 93) = 6.05, \eta^2 = .06, 95\%CI[.002, .172], p = .016$)，この効果は，シナリオによって異なることが示された。Bonferroni法による下位検定の結果，シナリオの種類に関わらず，後悔条件では，選ばなかった箱の中身がよりよいもの（500円）だとわかった後には，中身を知る前よりも感情がネガティブに変化していた（飴シナリオ： $t(93) = 3.45, d = .70, 95\%CI[0.28, 1.12], p = .001$ ；金銭シナリオ： $t(93) = 3.23, d = .63, 95\%CI[0.23, 1.04], p = .002$ ）。他の箱にも同じものが入っていたことがわかる統制条件では，金銭シナリオでは感情の変化が見られなかった ($t(93) = 0.78, d = .21, 95\%CI[-0.32, 0.73], p = .44$)。一方，飴シナリオでは同じものが入っていたとわかって，感情がポジティブに変化していた

($t(93) = -3.68, d = .21, 95\%CI[-1.16, -0.32], p < .001$)。飴シナリオの結果は、統制条件における賞品（飴1つ）の価値に対する評価の低さから生じた「ハズレではないか」という参加者の不安と、その後、他の箱の中身（飴1つ）を知った際の「これはハズレではなかった」という安心感を反映している可能性が考えられる。

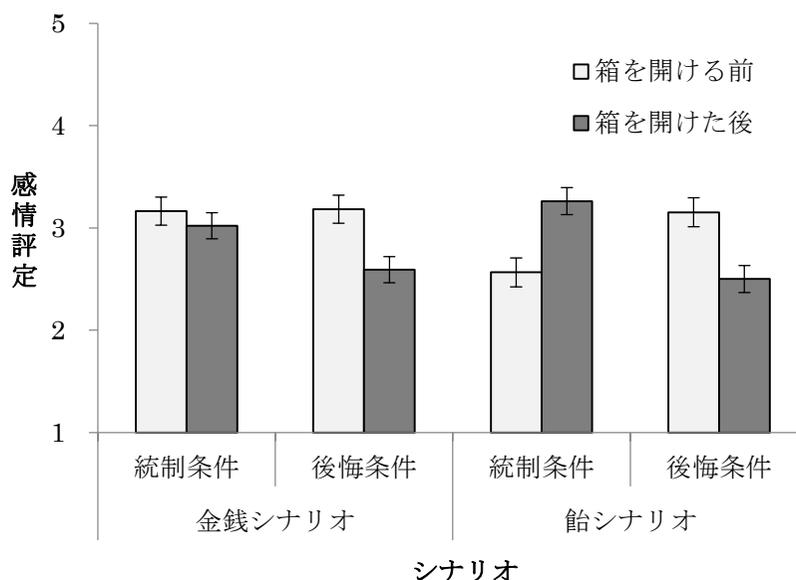


図2 条件ごとの感情評定の平均値と標準誤差

後悔尺度との関連 シナリオの妥当性を検討するため、後悔・追及者尺度の下位尺度である後悔尺度、シナリオ（ダミー変数：飴=1, 金銭=0）、他の箱を開ける前の感情評定値を説明変数、他の箱を開けた後の感情評定値を目的変数とした重回帰分析を行った。この結果、後悔尺度の得点は、他の箱を開けた後の感情評定値を有意に予測していた ($b = -0.29, SE = 0.13, 95\%CI[-0.54, -0.02], t(91) = -2.17, p = .033, adjusted R^2 = .03$)。この結果は、事前調査で使用したシナリオが後悔を測定するために妥当なシナリオであることを示している。

現在の進捗と今後の予定

現在、事前調査の結果を受け、シナリオ実験の仮想場面におけるゲームの賞品の質を調整し、児童向けの調査票を作成している。先述の通り、本調査の対象は、小学校4・5・6年生であり、後悔の経験のみならず、後悔の予測・利用能力の発達について検討する。本調査は、2016年2月に実施予定である。

引用文献

- Guttentag, R., & Ferrell, J. (2008). Children's understanding of anticipatory regret and disappointment. *Cognition & Emotion, 22*, 815-832.
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久 (2008). 意思決定における“日本語版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究, **79(5)**, 453-458
- Weisberg, D. P. & Beck, S. R. (2010). Children's thinking about their own and others' regret and relief. *Journal of Experimental Child Psychology, 106*, 184-191.
- Zeelenberg, M. (1999). The use of crying over spilled milk: A note on the rationality and functionality of regret. *Philosophical Psychology, 12(3)*, 325-340. doi: 10.1080/095150899105800
- Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2006). Looking backward with an eye on the future. In L. J. Sanna, & E. C. Chang (Eds.), *Judgments over time: The interplay of thoughts, feelings, and behaviors* (pp.210-229). Oxford, UK: Oxford University Press.